第3回ものづくり生命文明シンポジウム

NPO法人 ものづくり生命文明機構

NPO法人ものづくり生命文明機構は1月29日、東京・銀座の銀座フェニックスプラザで「第3回ものづくり生命文明シンポジウム」を開催した。資源や生態系、森里海の連環、モノづくりなどをキーワードに講演やパネルディスカッションを実施。地球環境に多大な負荷をかける物質文明を見直し、持続可能な社会の実現に向け、自然の循環に起点を置いた生命文明とモノづくりの果たすべき役割について考えた。会場は100人超の来場者で満席となり、関心の高さがうかがえた。

基調講演

モノづくり推進会議
超モノづくりへの挑戦

破壊が進む生命文明圏 —Out of sight, out of mind—

理事 谷口 正次氏（資源・環境ジャーナリスト）

「森里海守る」運動 世界展開

資源開発に伴い、環境破壊がどんどん進んでいる。世界の人口が69億人になり、この経済を維持しようとすると膨大な資源が必要になる。採掘現場では、自然と共生している「生命文明圏」の先住民の生活が脅かされている。「Out of sight」になっている。物質文明圏を文明の進歩と言っているが、その代償として生命文明圏を破壊している。

生物多様性の関係でみると、北緯35度から40度くらいの最も世界で生態系が豊かな地域に世界の40数%の資源が集中している。日本から森里海を守る運動を世界で展開し、森を守る文明をつくらなくてはいけない。

資源開発に伴い、人権、環境、労働、紛争などのさまざまな問題が起きている。こうした果てに、便利で豊かで快適な生活が維持されている、という認識を持たなくてはいけないのではないか。

豪州、インドネシア、フィリピン、パプアニューギニアなど、世界中で資源開発が進んでいる。先住民が聖なる山をあがめ、「生命文明」を営んでいる豊かな自然のある場所に資源があることが多い。

インドのオリッサ州で英国企業がボーキサイトの鉱山開発を行おうとした。先住民が反対し、「アバター」を製作したジェームズ・キャメロン監督に助けを求め、英国の有力者に反対を働きかけた。また、その企業に出資していた英国国教会が出資を引き上げ、インド政府はとうとう採掘を認めなかった。これは破壊を免れたケースだ。

プラトンは「万物は自然と偶然と技術（人工）でできている。最も美しくて完全なものが前の二つでできており、最も不完全で醜いものが三つ目でできている」と言っている。その最も不完全で醜いモノは、最も美しくて完全な生命文明圏を破壊してつくられる。その破壊の現場は人々の「Out of sight, out of mind」になっている。

「魚附き林」のメッセージ発信

理事 田中 克氏（京都大学名誉教授）

生命文明の基盤としての森里海連環学の深化

森里海連環学は2003年に京都大学で誕生した。それ以降さまざまなことがあったが、今後の11年からの3年間は意味深いものになる。11年は国際森林年だ。日本ならではのメッセージとして「魚附き林」を考えている。日本列島全体の森林が日本周辺の海の生き物と密接につながっている、という構想を日本から発信する。まず各地域で魚附き林のサミットを展開していきたい。

12年には韓国で国際博覧会があり、日本館のコンセプトとして森と里と海のつながりを世界に発信する。13年には宮城・気仙沼で「全国豊かな海づくり大会」のプレシンポジウムを行い、海づくり大会と植樹祭の統合を提案したい。地域で行ってきたサミットの全国大会にもするつもりだ。また、13年は森里海連環学ができて10年になるので学会を創設し、学問として定着させていきたい。

世界でも、森と海のつながりを注目し始めている。マングローブ林は魚附き林の典型だ。世界的なさんご礁のあるグレートバリアリーフは豪州北部の熱帯雨林から栄養物質の供給を受けている。

残念ながら日本列島の魚附き林は深刻な事態にある。典型的なのが、日本の原風景の一つである白砂青松の浜がなくなっている。また、公共財としての地下水が私的に自由にくみ上げられており、いずれ深刻な影響を与えるだろう。見えない水も大事にしなくてはいけない。

森里海連環学は国内だけの問題ではなく世界の進むべき道にとても重要だ。国際学会やシンポジウムで発表すると、東南アジアの若い研究者はストレートに受けとめてくれた。森のシンボルであるオランウータンと、干潟のシンボルであるムツゴロウの幸せのために頑張ろう、というメッセージを伝えた。従来、まったく関係ないと思われた生物が密接に関係している。それを明らかにしようとしているのが森里海連環学だ。

森里海の連環と水の循環—“若造”の視点と取り組み　事例紹介

顔が見える販売 心掛ける

農業 貫井 香織氏

実家は農家だが農業とは全然関係ない人生を送ってきた。29歳で実家に戻り農業を始めたのは事業を拡大、継続したいというのが動機だった。埼玉県入間市で狭山茶の製造・販売とシイタケ栽培を行っている。両親と私、障害者2人で従事しており、規模が小さいことを生かして製造から販売まで手掛け、顔が見える販売を心掛けている。

シイタケの栽培方法には原木栽培と菌床栽培の2種類あり、私たちはナラやクヌギの原木を使った自然に近い原木栽培を行っている。

住宅材に国産材使う仕組みを

林業 田島 大輔氏

慶応大学4年生で林業の〝こせがれ〟だ。大分県日田市にある父の会社は1200㌶の森林を保有し、年間3000立方㍍の木を販売している。50年育てた杉の木は1本2000円という安い値段だ。日本の木材自給率は24%にすぎない。将来目指しているのは、経営者・従業員が十分に生計を立てられ、一般の人が山に愛着を持ち遊びに来る林業だ。違法伐採の木材輸入を制限し、国産材を住宅材に使える仕組みを考えていきたい。経営ではクリスマスツリーファームなどをやりたい。

東京育ちの海女さんに

漁業 鈴木 直美氏

生まれも育ちも東京で千葉県南房総市で海女さんになった。2008年に漁業権を取得した。幼少のころからイルカと泳ぎたいと思っていた。大人になってからイルカと泳ぐチャンスがあり、水中でできる仕事を探したところ海女さんに出会った。昔は、海女さんが夏の1シーズン仕事をすれば会社員の年収を稼げたと言う。少しでも水の中にいたいと思い、絶滅しかけている海女さんになれないかと漁協を回った。漁のメーンはアワビでサザエやトコブシ、テングサなども採っている。

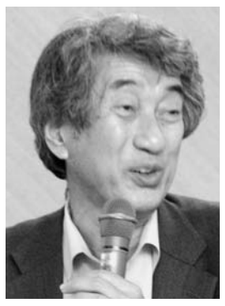
秩父の山の恵みに感謝

秩父今宮神社禰宜 塩谷 崇之氏

水の循環を守る神社の〝こせがれ〟で普段は弁護士をしている。神社は埼玉県秩父市にある。かつて荒川や利根川などの河川は関東平野の農業、林業、水産業をつないでいた。そのつながりにより江戸が栄え、江戸の人たちはそのことをよく知っていた。町に住んでいても山への感謝を忘れなかった。秩父は観音霊場が発達したところで、秩父に来て山の恵みに感謝した。また、神様へのお供え物には森里海の産物をささげており、昔の人は森里海のつながりの大切さをわかっていた。

コメンテーター

理事 畠山 重篤氏（NPO法人 森は海の恋人代表）



私は昨年から農林水産省のある審議会の委員に任命され、東京・霞が関に行くようになった。農水省は米の消費量の引き上げに力を入れているようだが、森里海の関係を知って海を豊かにすれば簡単にできると思う。例えば、すしの価格はほとんどがネタ代なので、魚介類がたくさんとれるようになればすし代は半分になる。みんながすしを食べに行けばご飯を食べるようになる。私が住んでいる気仙沼は豊かな海によみがえった。山に木を植え始めて23年目になっている。

パネルディスカッション

生命文明に向けて ～“適応”から“本来”へ～

「森里海の連環と水の循環—〝若造〟の視点と取り組み」と題し、事例を紹介

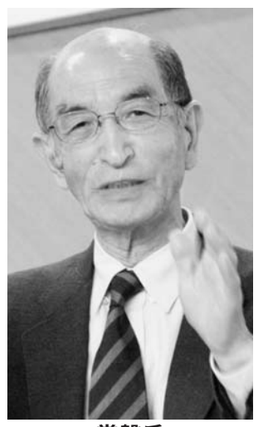
パネリスト
- 大橋力理事（国際科学振興財団主席研究員、文明科学研究所所長）
- 常盤文克理事（日本モノづくり学会会長）

司会
- 谷口正次理事

谷口 「〝適応〟から〝本来〟へ」というテーマですが、現代文明で私たちの本来あるべき姿が問われています。それぞれの観点からお願いいたします。

大橋 生物の遺伝子の設計と、それが進化的につくられた環境とは、鍵と鍵穴のようにピタリとはまり、最もローコストでストレスなく生存できる。これが「本来」の状態。しかし、遺伝子設計と環境との間にズレが生じると、普段は眠っている緊急用遺伝子が読まれ新しい活性を発揮してズレを補正する。これが「適応」。適応状態では、ストレスが発生し、普段は眠っている遺伝子を読み出すために余計なコストが発生するというデメリットがある。しかも、もともと遺伝子に書かれていない活性は発揮できないので適応できる範囲には限りがある。現代生物学では、「生きること」イコール「適応」と考えられ、「あるがまま」美しく生存する「本来」が見落とされてきた。近現代文明は、「適応」の度合いをどんどん大きくして生き延びてきた。生命文明は、遺伝子に約束されている「本来」を志向するものという。

大橋氏



常盤氏

シンポジウム会場

生命文明は「本来」を志向　大橋氏
モノづくり 心の付加価値を　常盤氏

常盤 人類が道具を手にしてモノをつくり出したときから、モノづくりは人間存在の根源にあった。つまり、生きることはモノをつくっていることに支えられてきた。常に我々の生活あるいは社会の基盤を形成しているのがモノづくりだった。そこでモノに生命を感じ取るような人の感情が生まれてきていると思う。モノへの感謝や祈りがあった。モノをつくる、とは何か。人間はモノをつくりたくて仕方ない動物だ。創造的な喜びと人の役に立っているという社会的な喜び、この二つがモノをつくるときの動機になっているのではないか。モノづくりは今まであまりにも技術に偏りすぎていた。心の面から、自然から考えてみると、人の命、その命を支えている大きな文明と、モノと文明と人の命というものが重なってくる。

谷口 科学の目から利他的であることの優位性を教えてください。

大橋 人工生命のシミュレーションでは、不死の生命と有死の生命とで生存競争をすると、地球のように有限で不均質な環境では、有死の生命の方が優勢になって圧倒する。有死の生命は、自らを解体して場所と材料を子孫に提供し、増殖を繰り返すうちに、突然変異が数多く発生して今まで生きられなかった場所で生きられるようになる。さらに利他性の度合いがより大きい種が、より繁栄するという結果が出ている。

谷口 今は物質文明があまりにも強大なため、大量生産・大量消費、大量廃棄が行われています。

常盤 大量生産・大量消費は明らかに経済的な存在としてある。これがなければ食べていけないが、それだけではなく対極という議論があってこそ本当のモノづくりだと思う。今のモノづくりは片方に寄りすぎているのではないか。「こっちもある」と日本らしいモノづくりを行うことで、グローバルなマーケットで日本の存在を主張できるのではないか。

谷口 モノづくりと物と心の断絶について、意見はいかがですか。

大橋 戦後の日本の発展をみると、無理やり人工的な価値構造をつくり、その上に「ほしくなる」という気分構造をつくった。意識・無意識を問わず行われてきたその枠組みを見直したらいいと思う。

谷口 コモディティーについてどのようにみていますか。

常盤 コモディティーはみんなが毎日使っているものだから、それ自体は大変重要だ。ただ、それだけでは人の心は豊かにならないのではないか。暮らしから得られる幸せや喜び、豊かさはもっと心の付加価値を与えるものでないといけない。今は安くつくってたくさん売ろうという発想の中で忘れている。少し離れて目を向けると、新しいモノづくりの道がある。

「森里海連環基本法（憲章）」の提唱

常任幹事 中井 徳太郎氏（財務省主計局主計官）

山、森、里、川、海を循環する水の循環系は、人間を含む生きとし生けるものの命をはぐくみ、生命活動を支え、豊かな生態系を守る根本。近代文明以降の人類活動は人間主義の合理主義、科学的真理の旗印の下、人間にとって短絡的、部分的効用を追い求めてきた。

その結果、地球環境問題や地球生態系の劣化を引き起こし、食料、資源、エネルギーの枯渇の危機を招来している。地球を次世代以降に継承することも至難となった。

未来へのグランドデザイン

さらに自然の恵みに対する感謝と畏敬の念を忘れ、人間は自然と結びついているという感受性や実感、人間同士の共同体的つながりを喪失した。

こうした状況に対し、近現代文明を総括し、新たな生命文明の時代を切り開かなければならない。すなわち人間は生きとし生けるものの命の原点に立ち返り、森里海の連環する地球の自然、生態系に包まれて存在し、生かされていることに目を向けることが問われる。

生命文明の時代における人間のあり方、自然・生態系へのまなざし、命への洞察を共通の了解とし、人間活動の軌道修正を可能とするため森里海連環憲章を策定する。人の自然への働きかけの再構築を通じて、温暖化や食料問題、さらに人間活動を取り巻く諸問題を解決するため懐かしい未来へのグランドデザインを描き出す。それをアジア・世界に発信していく。

感想・総括

トルストイの教えに根本あり

副理事長 大竹 美喜氏（国際科学振興財団会長）

昨年11月はロシアの大文豪トルストイが亡くなってちょうど100年だった。トルストイは思想家であり、教育者、芸術家でもあった。トルストイの教えそのものに、ものづくり生命文明機構の根本があるのではないかと感じた。彼は当時から日本に対して欧米型の思想についていくのをやめなさい、と警告を発していた。シンポジウムを通じ、一人ひとりが自分に与えられた役割が何かをしっかり考えて行動していけば、日本だけではなくアジア諸国、世界でも動きが出てくるだろう。